下野市立南河内小中学校

１　学校課題

基礎基本の定着を図り、児童生徒が意欲的に取り組む授業の工夫
～確かな学力と主体的に学び合う態度の育成を目指して～

２　研究計画

（１）主題設定の理由

義務教育学校としてスタートした昨年度は、「主体的に表現し、伝え合う児童生徒の育成」を研究主題に設定し、コミュニケーション力の育成を目指して研究を進めてきた。しかし、自分の考えをもって主体的に学び合う態度を育てるためには、その土台となる基礎基本の力の更なる強化及び児童生徒一人一人が意欲的に集中して学習に取り組む態度の育成が必要であると考えた。

そこで、今年度はもう一度学習の原点に立ち戻り、学習習慣の見直しや、語彙力の強化等による基礎基本の徹底を図り、主体的に学び合う力の素地を育成、強化していくこととした。

（２）研究の仮説

次の２点について取組を進めていけば、基礎基本の力が身に付き、主体的に学び合う児童生徒の育成につながるであろう。

①学習習慣の見直しを図り、授業等を通して学習の基礎基本の習得・徹底を図る。
②児童生徒が集中し、夢中になれる授業の工夫を図る。

３　研究内容

本校児童生徒の学力向上のためには、長期的展望に立って全校体制で取り組んでいくことが必要であると考えた。本年度は児童生徒の日常の学習活動全体に目を向け、課題解決を目指した。

（１）日常の学習指導を通した主題への取組

①基礎基本の徹底

ア　前期課程は算数、後期課程は国語・数学・英語を中心に基礎的内容の習熟を図るため、授業、朝の活動、家庭学習などを通して、基本となる簡単な四則演算や前学年までの内容などを繰り返し練習させた。また、ｅライブラリにも積極的に取り組むようにした。

イ　児童生徒が身に付けるべき基本的学習習慣として、学習用具やノートの使い方などのルールや、元々あった「学習のきまり」を再確認し、全校での徹底を図った。

ウ　保護者の学習指導への理解と関心を高めるため、学年だよりや学級懇談会などで児童生徒の学習への取組や、学校で指導していること、課題点などを、場を捉えて伝えた。また、後期課程の定期テスト期間に合わせて前期課程は「家庭学習強化週間」を設定、保護者と児童が一緒に学習目標を決めたり、結果を振り返ったりして、児童の家庭学習に保護者が関わる機会とした。

②児童生徒が夢中になる、集中できる『分かる』授業の実践

ア　授業の工夫・改善を目指すため、次のような視点を設定し、教師間で共有した。

- 身に付けるべき力を明確にしためあての設定と、それに対応した振り返りの工夫
- 児童生徒の意欲が高まる課題や教材、それらを提示するタイミングや活用方法の工夫
- 誰もが本時のねらいに迫っていけるような、児童生徒への支援の工夫
- 授業におけるＩＣＴの活用
- 授業の中で既習事項と本時の内容をつなぐことや児童生徒の考えや言葉・活動をつなぐことなど、授業者のコーディネーターとしての意識や技能の向上

イ　年間３回の「校内授業公開研修期間」を設定し、一人一回以上の授業公開を行った。上記の授業の視点を意図した授業を前期・後期課程に関わりなく参観し、感想や意見は Google の Jamboard を活用して教師間で共有した。

（２）Ｓ＆Ｕコラボ事業研修会を通した主題への取組

①講師を招いての職員研修

月日	対象	講　師・演　題	講　話　内　容
7/31	職員	宇都宮大学共同教育学部 准教授　司城 紀代美 先生 「インクルーシブ教育の 視点から考える授業づくり」	・「インクルーシブ教育」とは、「多様な子供たちの違いが『価値あるもの』として受け止められる教育」である。 ・子供一人一人の認知には個人差があり、得意なことやつまずきも多様である。教師はその個々の多様な特性を「つなぐ」のが役割となる。 ・「つなぐ」場面を大切にした授業づくりの視点についての具体的な例。

②授業研究会

月日	学年	単元名	課題追究のための手立て等
10/11	７年	社会科「アフリカ州」 	・既習内容を活用する活動を通して、知識の定着を図る。 ・多様な情報を資料として与えることで、生徒が関心を持った視点で学習課題の解決を目指せるようにする。 ・班の話合いや意見の発表を、生徒が主体性を持って効果的に進め、相互の活動を「つなぐ」ためのツールとして Google の Jamboard を活用する。
11/20	４年	算数科「面積のはかり方と表し方」 	・授業の「めあて」や「まとめ」を児童の言葉で作る。 ・既習事項を本時の学習に「つなぐ」ことで課題解決を図る。 ・ワークシートやヒントカードを工夫し、多様な児童の考え方やつまずきに対応する。 ・ペアやグループで伝え合う場を設定することで、どの児童も自信を持って活動できるようにする。

４　本年度の成果と課題

昨年度に引き続き、義務教育学校の良さを生かして、前期課程から後期課程までの９年間のつながりを考えながら研修を進めた。

（１）研究の成果

①簡単な内容から繰り返し取り組ませることで、徐々にではあるが、計算力の向上や基礎的内容の定着などの手応えを感じられるようになってきた。

②児童生徒が「分かる」授業のためには、教師の「つなぐ」役割が重要であること、その方法は多様にあることを、研究授業や公開授業などの実践の中で実感し、共有することができた。

③授業における児童生徒の対話・意見交換の場が増え、児童生徒が共に学ぶ良さ・楽しさを感じる様子が見られた。

④教員同士が前期課程と後期課程の特性を互いに理解し、良さを取り入れることで、授業の技能や支援の選択肢を増やすことができた。

（２）研究の課題

①基礎基本の定着には、さらに継続的な取組が必要である。今後は児童生徒の学習への意識や学習習慣をさらに改善していくため、保護者への啓発を推進し、意識の向上にも努めていきたい。

②広い視点で課題解決に取り組んだ分、教師同士の取組を練り上げたり、解決策を焦点化したりすることが難しかった。本年度の取組をもとに、目標や手立てを絞り込んでいく必要がある。